

Title	タイ国のナック・レン・プラ（プラ・クルアン・コレクター）における正統性の構築
Author(s)	石高, 真吾
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43312
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	石 高 眞 吾
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 1 6 7 1 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 1 4 年 3 月 2 5 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学 位 論 文 名	タイ国のナック・レン・プラ (プラ・クルアン・コレクター) における正統性の構築
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 中 川 敏 (副査) 教 授 小 泉 潤 二 教 授 春 日 直 樹 助 教 授 栗 本 英 世

論 文 内 容 の 要 旨

本論文ではタイ国のナック・レン・プラ (護符コレクター) の正統性言説の構築についてみていきたい。

第一部ではナック・レン・プラの蒐集対象であるプラ・クルアン (仏教関係の護符、主に携帯可能な小仏像) についてみてきた。プラ・クルアンは歴史的にはインドで創られた仏教的聖物に起源を発する。製造方法も最初は入手し易い素材である土や布製だったものが金属の様な技術を要するものになっていった。

タイ国に仏教が伝来したのは7世紀頃のドヴァーラヴァティー朝の頃と考えられる。この時代の仏教は上座部仏教であった。この地代にはインドのグプタ様式の仏像が伝来し、同時にプラ・ピムと呼ばれる素焼きの粘土製のプラ・クルアンも作られていた。この頃のプラ・ピム建立目的は寺院の高僧のような有徳の士を追悼するものであった。

タイ国に上座部仏教が伝来したドヴァーラヴァティー朝当時プラ・クルアンの用途は仏陀の現世での顕現としての積尊個人へのオマージュではなく仏教という非人格的概念へのオマージュであった。

やがて9世紀の頃から東北タイ地方のプラ・ピムで用途の変化が見られるようになった。仏教という非人格的概念へのオマージュから死者へのオマージュあるいは施主本人の将来・来世での幸せを願うという願望成就へ変わっていく。この目的の下では功德積み (タム・ブン) の手段としてプラ・ピムが用いられていたのである。

ここまでではプラ・ピムは寺院や仏教徒関わりのある史跡に静的に奉納されていた。ところが、アユタヤー朝陥落 (1767年) 以降寺院が戦火によって破壊される事で今まで寺院等の建造物中に埋められていたり、奉納されていたプラ・ピムが大量に人々の眼前に現われた事でプラ・ピムは携帯可能な仏像、仏教の加護の象徴と考えられるようになった。

ここでプラ・ピムは護身という新たな効能が附与されたのである。護身という字義の通りこの頃は身体を危険から護る、あるいは危険な目に遇わせないという用途のみであった。ラタナコーシン朝 (1782年～現在) に入ると寺院でのタム・ブン (喜捨) のお返し・記念品としてプラ・ピム、プラ・クルアンが多く作られるようになる。19世紀の頃には既にプラ・ピムは携帯可能な護符であり、主に仏像や仏教に聖者、高德の士をモチーフにしたものとして認識されるようになった。

プラ・ピムを含む携帯可能な護符の総称であるプラ・クルアンには「護身」に加え新たな効能が附与された。それは、メーター・マハーニヨム (人気者になる) とチョーク・ラーブ (開運・金運) である。これら二つの効能はタイ国が消費社会へと変貌した際に人間関係を潤滑にする必要から要請されたものである。プラ・クルアンの力の源には

2つの要素がある。それはブラ・クルアンの素材や意匠といった可視的要因と聖化儀礼（ピティー・ブルックセーク）による超自然的力の入魂儀礼という不可視的要因に分けられる。

可視的要因の一部である素材については、素材が仏教で云う四大種（地、水、風、火）の属性に分類され、その組み合わせによってどの効能に秀でているかが決定されると考えられている。

意匠は主にコームと呼ばれる古クメール文字とヤンと呼ばれる呪術的文様に大別できる。コームは上座部仏教の経典用語であるパーリ語であり、短い経文であるカーター（偈）またはその音節の数を数字で記す。ヤンはカーターを意匠の一部に含む仏教の影響を受けた呪術的文様である。

ブラ・クルアンの効能の不可視的要因であるピティー・ブルックセーク（聖化儀礼）については、可視的要因によって形態的にはブラ・クルアンとして完成していたモノに儀礼によって魂を込めるのである。ピティー・ブルックセークは大乗仏教に端を発する。と同時に儀礼の進行にはヒンドゥー教のブラーマンがかかわるというシンクレティックな要素も含んでいる。

本稿ではタイ国北部チェンマイ県のムアン市にある古刹ワット・プラシンでのピティー・ブルックセークを事例に取り上げた。これはチェンマイ建都700周年記念事業の一環として行なわれた。

儀礼は寺のウィハーン（本堂）で行なわれた。ウィハーンの内中央には聖化されるブラ・クルアンが安置されその正面には供物が供えられている。ウィハーンの上にはサーイ・シンと呼ばれる白い綿糸がいたるところに張り巡らされている。

儀礼は俗界のVIPである大蔵省副大臣、チェンマイ県知事、県選出の国会議員などの出席とタイ国北部各地の名僧の出席によって行なわれた。ティアンチャイと呼ばれる儀礼開始を告げる大蠟燭の点火を合図に儀礼は開始された。

その後チャイモンコン・ブラカーターと呼ばれる経文の読経が9名の僧侶により始まりその聖なる力は読経する僧の手に結ばれたサーイ・シンによってブラ・クルアンに伝達される。その後カーター・プッタピセークという経文読経中には12名の他の止観している僧侶により、僧侶の聖性がブラ・クルアンに伝達されるのである。

読経終了後ナム・モン（聖水）とジャスミンの花をブラ・クルアンの上に降りかける事で儀礼は終了する。

第1部ではブラ・クルアンの製造過程について焦点を当ててきた。第1部では「聖なる世界」という場での宗教財としてのブラ・クルアンについて論じた。一方、第2部では本稿の論点である「俗なる世界」でのブラ・クルアンとそれを蒐集する人々について論じた。

ブラ・クルアンのコレクターはタイでは「ナック・レン・プラ」と呼ばれる。ナック・レン・プラのうちある者はブラ・クルアンの商品としての性格を指して「プッタ・パーニット」と称している。これは「仏教に関連した商業・ビジネス」というタイ語の造語である。プッタ・パーニットとしてのブラ・クルアンにはタラート（市場）が存在し、そこで商品として流通している。タラート・プラ（ブラ・クルアン・マーケット）の種類には実際の「場」としてのマーケットの規模の大小やオークション、インターネット、雑誌による売買などがある。

ブラ・クルアンを専門に扱った雑誌（ブラ専門誌）はブラ・クルアンの商品性を高めるため、奇跡譚やどのブラ・クルアンが、人気があるのか、真贋の判定基準などについて述べている。ナック・レン・プラ以外の者にも分かる正統性はブラ雑誌によって創られる。

プッタ・パーニットは「聖物」と同時に「商品」でもある。コピトフによれば「聖なるモノ」として「単数化」されたモノは脱商品化の方向に向かう。しかし、プッタ・パーニットとしてのブラ・クルアンには2つの単数化が見られる。それは、メディアによる奇跡譚や希少性の語りによる「ブランド化」での特定の「モデル」の単数化と、ナック・レン・プラが自分のブラ・クルアンをコンテスト（パクワット）に出品する事で生じる「個別的」な単数化が見られる。

コンテストに出品する事で個別のブラ・クルアンの「真贋」という正統性が公に判断される。しかし、ナック・レン・プラは単純にこのコンテストによる正統性言説を認めない。なぜならば、ナック・レン・プラにおけるブラ・クルアンの正統性言説は、モノ自体ではなく、人間関係や所有者の人格によって構築されるからである。

ナック・レン・プラはブラ・クルアンの「真贋」を判断する最大のクリテリアに「誰からチャオ（ブラ・クルアンを購入する）したのか？」という事を置く。コンテストで入賞したブラ・クルアンは審査委員がその所有者と知り合

い場合は、贋作の場合でも入賞すると考えている。なぜならばその所有者はそのコンテストを主催するプラ・クルアン同好会のメンバーだからである。

一方、客観的に真贋を判定する場合、その判断基準はどこから得られるのか？ここで、ナック・レン・プラの中でも師匠とみなされているプラ・クルアンに関する知識の有る「通人」が重要となる。「通人」達のプラ・クルアンに関する言説はナック・レン・プラという集団の内部、仲間の言説である。従って、通人の言説はナック・レン・プラに支持されるのである。これを本稿では「近い正統性」と名付けた。「近い正統性」は身近な師匠の言説のために信用される。

反対に、ナック・レン・プラにとって疎遠なコンテスト、メディアといった遠い存在による言説は「遠い正統性」として認識される。「遠い正統性」は、プラ・クルアンに関心の無い部外者にとっては「権威的」であるがゆえに正統性を有するものとして受け止められる。ところが、ナック・レン・プラは直接的には信用しない。ナック・レン・プラは、一旦「近い正統性」の担い手である通人によってその正統性言説の内容が裏打ちされて初めて信頼するのである。通人が触媒となって「遠い正統性」の言説内容を「近い正統性」に取り入れるのである。

正統性言説のテーマであるプラ・クルアンの「本物」をナック・レン・プラは次のように理解している。つまり、「本物=本物 i +本物 ii」である。「本物 i」とはアイデアとして、理想としてナック・レン・プラの頭の中に想定される「本物」である（絶対的本物）。この「本物 i」はアイデアであるために「遠い正統性」に属している。一方、「本物 ii」は実物・個体としてのプラ・クルアンである。本物 ii は本物 i をモデルに具現化したものである。本物 ii は身近に存在するために「近い」。本物 ii は、通人による「近い正統性」に支持されている。しかし、通人達の「近い」正統性は、贋作をも本物と判定してしまうこともある。なぜならば、贋作も有力者のコレクションの場合は「本物」とされてしまうようにナック・レン・プラの人間関係の中では本物なのである（相対的本物）。ナック・レン・プラ以外からみれば、この「本物 ii」は曖昧な「本物」なのである。このようにナック・レン・プラの「本物」は「本物 i」と「本物 ii」から構成されているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、タイ国における護符（プラ・クルアン）をめぐる文化的状況について、3年半の現地調査および文献調査に基づいたオリジナルな人類学的研究である。論文の焦点はナック・レン・プラーと呼ばれる護符コレクターの行動にあてられ、彼らの中でいかにして護符の正当性および正統性が構築されていくかについて詳細な分析がなされた。聖なる出自をもつ護符が、コレクターの市場に取り入れられる際、護符はその価値の源泉として聖性（聖化儀礼、効能その他）だけでなく、「美しさ」その他の俗なる属性をも駆使して語られるようになる。本論文は、護符の価値の二つの源泉、聖なる性質と俗なる性質が、いかにして、じっさいに護符コレクターの間で活用されるのかについての、自身のフィールドデータに基づく緻密な考察である。人類学理論という脈絡においても、贈与交換と市場交換のギャップを架橋する、すぐれた論考となっている。

以上により、本論文が、課程博士の論文として学位を授与するに十分であると判定した。